

1 庭園の概要

既存の池泉庭園に中島を作り、背後に多くの築山を設けた。高野山が8つの峯に囲まれた聖地であることから「蓮華八葉」を象ったといわれている。旧来の様式を踏襲しながらも、説話を視覚化した築山を設け、その築山や鶴亀島に石を組むことで、奥行きのある深い重森独特の庭に仕上げた。

なお、高臺院Ⅰは平成2010年に登録記念物(名勝地)に指定された。

2 庭園の特徴

この庭は枯山水庭園とも池泉庭園とも言える、何とも形容しがたい庭である。その特徴を要約すれば以下の三点である。

①石組みの特徴

池泉庭園に鶴島と亀島を作ったが、池の護岸や鶴島、亀島の護岸には一切石組がされていない。一見古典的な造形のように見えるのだが、このような設計は、池の水面を白砂に変えてみれば、後の重森の枯山水の意匠そのものである。つまり枯山水の手法で作っているのだ。なお、古典的な鶴島、亀島の造形は象徴的な石組みのみですっきりした意匠だ。

②明確なテーマとその造形化

重森は上記「蓮華八葉」のテーマに因んだ造形として、山畔に八つの築山を作った。このようにテーマを捉えることによって、類例のない独創的な庭が生まれるのである。

③デザイン化された敷石

軒下の敷石である。重森独特のデザイン化された敷石である。すなわち丹波鞍馬石を敷き詰め、目地は強烈な弁柄色のセメントである。さらに、特徴付けられるのはその先端部分にデフォルメされた洲浜が造形されている。

なお池に張りだしている苔地の洲浜もあり、敷石の洲浜と二種類の洲浜が併存した珍しい例だ。



鶴島は羽石で象徴(左)、右側の亀島は三尊式の蓬莱山を背負っている。島中や山畔上の立石は、庭園に空間構成美を形成し、かつ奥行きのある深い庭にしている。



鶴島、亀島の奥に「蓮華八葉」を象徴した築山。



重森の分身ともいえる洲浜が軒下にある、庭園に奥行き効果を出している

3 登録記念物(名勝地)の申請理由

①重森の庭にはその場に即したテーマがあり、そのテーマに沿った躯体的な造形を視覚化している。あるべき庭園の規範となる貴重な庭園である。

②枯山水の庭園を得意とした重森は、既存の池泉庭園の地割を活かしながらも、枯山水的な手法で造園しているところに重森らしさが出ている貴重な庭園ある。即ち池泉の護岸や鶴島、亀島の護岸には石組がなされていない。

③軒下には一目で重森であるとわかる洲浜模様の敷石がある。入り組んだ港のような造形は前垣家から始まり、当高臺院を経由して、横山家、志方家への受け継がれた、重森の伝統的な造形として貴重な庭である(資料1参照)。

4 庭園の詳細写真

①各方面から撮った庭園

庭園と建物の関係、池泉部と蓮華八葉部の関係が解る写真を掲載いたします。

- ・池泉部の護岸および鶴亀島の護岸には、一切の石組みが無い。
- ・石組みをみると、鶴島は羽石で象徴され、亀島は三尊式の蓬莱山で象徴されている。一方、山畔部の石組みは鶴島と亀島の石組に呼応する程度である。これは背後の「蓮華八葉」の造形がクッキリと浮かび上がらせるためではなかろうか。



庭園に向かって右側にある飛び石からの景



右側山畔から庭園を望む



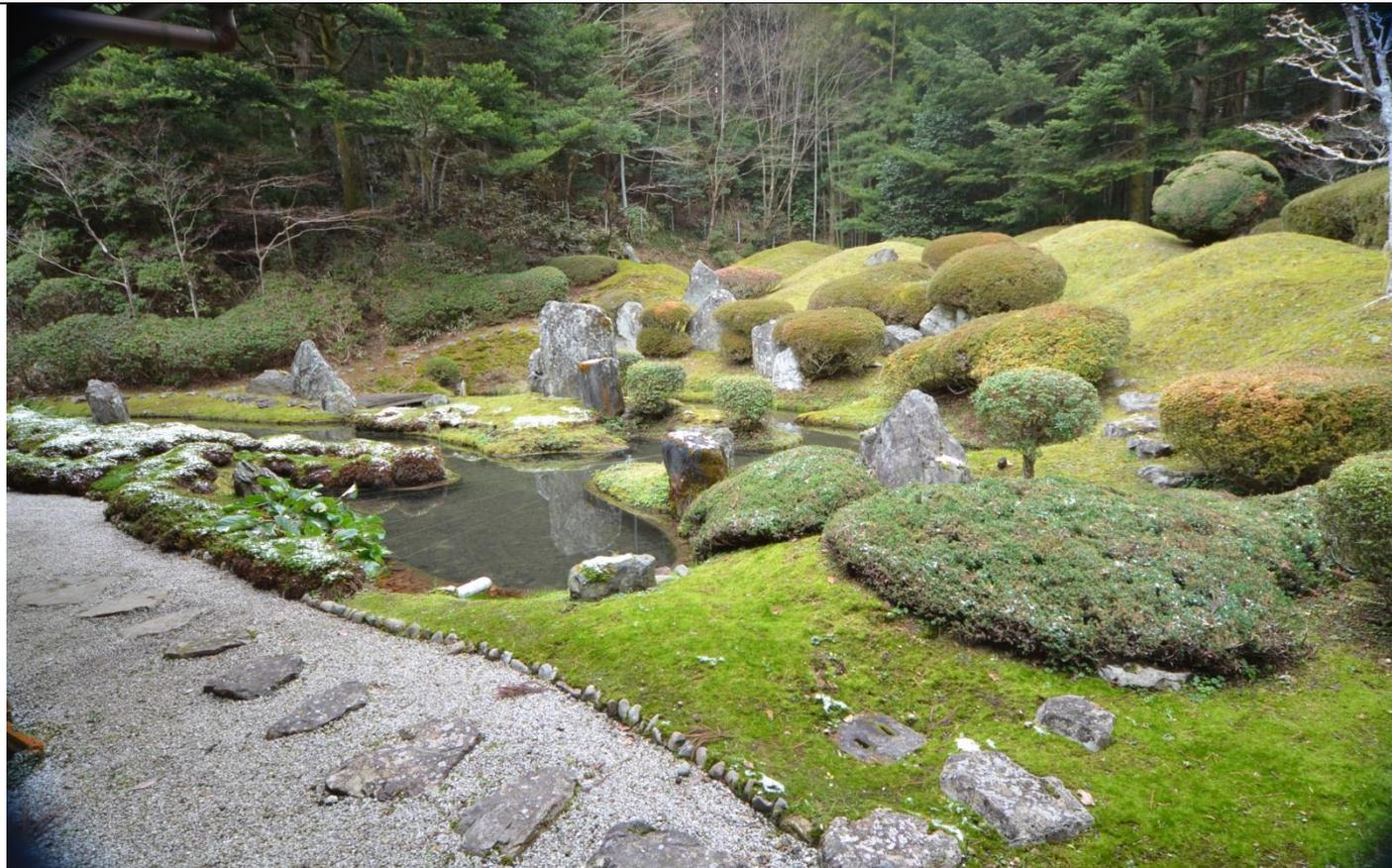
山畔部の蓮華八葉部から建物と庭園を望む



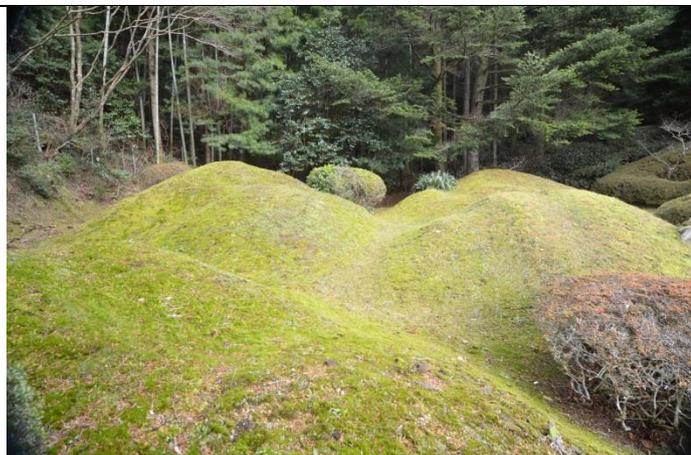
左側山畔部から庭園の背後と軒下の洲浜模様の位置関係

2 蓮華八葉の造形

聖地と言われるところは「蓮華八葉」に相応しい場所を選んでいる。例えば高野山や白水阿弥陀堂などである。重森は当庭を作るにあたって、池泉部背後の山畔部に蓮華八葉に因んだ造形をした。高野山ならではのテーマである。彼は既に東福寺本坊庭園において、「五山」を象徴した五つの土盛りをしている(下段に写真表示)。



庭園背後の山畔部に、さらに土盛りをして煉瓦八葉の造形を作り、背後の山林との境界線の役割も負わせた、と思われる。



山畔上部の左側より、庭園の右側に見える蓮華八葉の造形



右側山畔上部より、庭園の左側に見える蓮華八葉



右側山畔よりの蓮華八葉(疎らに撒いた栗石の意味は不明)



東福寺本坊 (S14) の「五山」を象徴した造形

3 洲浜模様

重森三玲の庭園においては「洲浜模様」の持つ意味は大きい(資料1に詳細記述)。大別すると以下のように分類できる。

- ①庭園の基本的な地割を洲浜に負わせ、その上に石組みを行う。
- ②奥行きが少ない地形においては、書院軒下などに洲浜を設け、視線を軒下の洲浜に向ける(S30 前垣家に始まり多くの例あり)。



書院の前に既存の池庭があり、背後には山が迫っている地理性を克服策として、洲浜を採用した。写真のように奥行を出す。



庭園側から見た、書院と洲浜・飛び石の景



洲浜の横からの景



洲浜左側から庭園を望むと、洲浜は庭園と一体になる。



左記反対側からのアングルでの景

資料 1

洲浜の歴史：平安時代までの庭園は池泉部周辺の護岸の造形として「荒磯」「洲浜」「曲水」「須弥山」が主体の造形であった。ところが鎌倉時代以降は禅宗や水墨画の影響から山畔や築山に石組みされるようになり、立体造形が多くなった。しかし洲浜の造形は廃れることはなかった。特に重森においては個人邸における枯山水庭園には欠くことのできない造形であった。

①古庭園について：奈良・平安における洲浜は自然を写した造形としてではなく、天国の象徴として欠くことのできない造形だ。



東院(奈良時代)：栗石による洲浜の造形。洲浜の先端にある約 60 cm の石(造園時は立石と思われる)は後世「荒磯」と言われる造形が既に芽生えていることが解る。あたかも桂離宮の州浜先端にある「岬灯籠」のようである。重森の洲浜の原点でもある。



宮跡(奈良時代)：約 55m ある曲水の庭には出島状の洲浜が 3 箇所あるが、中世の作庭記に記された「荒磯」そのものである。このような形は重森庭では春日大社・斧原家・前垣家・小林家、そして遺作となった松尾大社である(宮跡発掘は重森庭の後)。



平等院(平安時代)：鳳凰堂は池中に浮かんでいるが、周囲は栗石による洲浜で囲まれている。即ち此岸ではなく彼岸を象徴。



浄瑠璃寺(平安時代)：中島および東岸出島にも栗石による洲浜が造形されている。極楽浄土の庭の象徴である。



毛越寺(平安時代)：極楽浄土の洲浜の造形は何と云っても「毛越寺」について示さなければならない(昭和13年に重森が発見)。



西芳寺(鎌倉時代)：洲浜は庭園の景色に奥行きを与える。



天龍寺(鎌倉～南北朝)：もし、この洲浜が無かったなら、対岸の龍門瀑の造形は扁平な屏風絵のようになってしまうだろう。



桂離宮(江戸時代)：岬灯籠と天橋立



同左：中島の洲浜は苔地による



仙洞御所 (江戸時代)

小堀遠州による幾何学模様の州浜が特徴的。また対岸の護岸は一直線に造形されており、遠州の斬新さが際立つ。

②重森三玲の作品

洲浜模様は重森の最も重要なテーマであり、造形である。重森は昭和 12 年に毛越寺で洲浜を発見したが、その造形の美しさと海洋を象徴するテーマ性に意味を見出し、生涯この造形に挑戦した。と言うよりは、作品ごとに新しい造形が湧きあがったのではないだろうか。洲浜の造形を確認することは、脱皮し続ける重森自身と云っても過言ではないと思う。

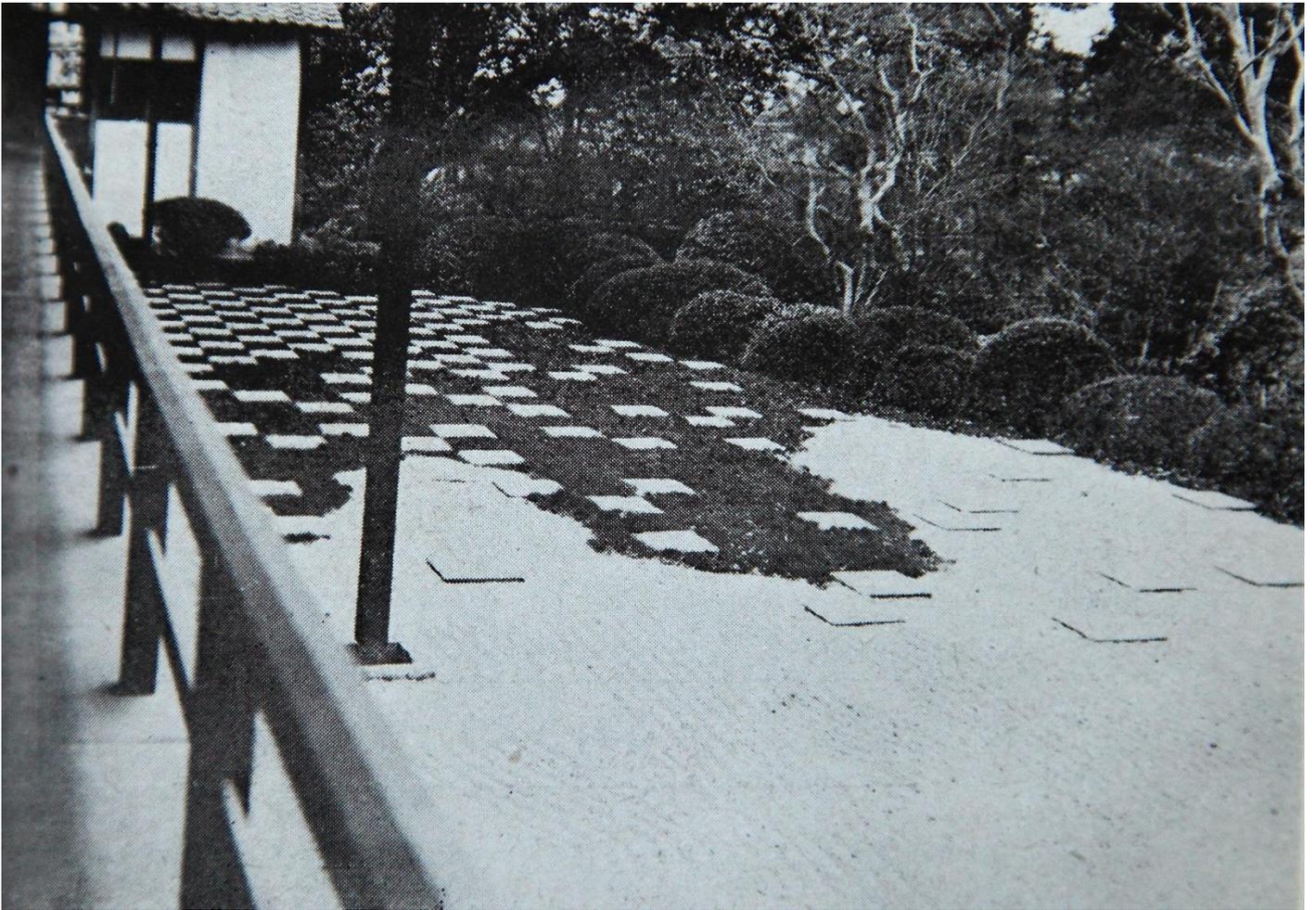
ここでは、煩雑になるが、彼の生涯にわたっての洲浜模様を表示し、重森が拘った洲浜により発展し続ける庭園の造形を見る。



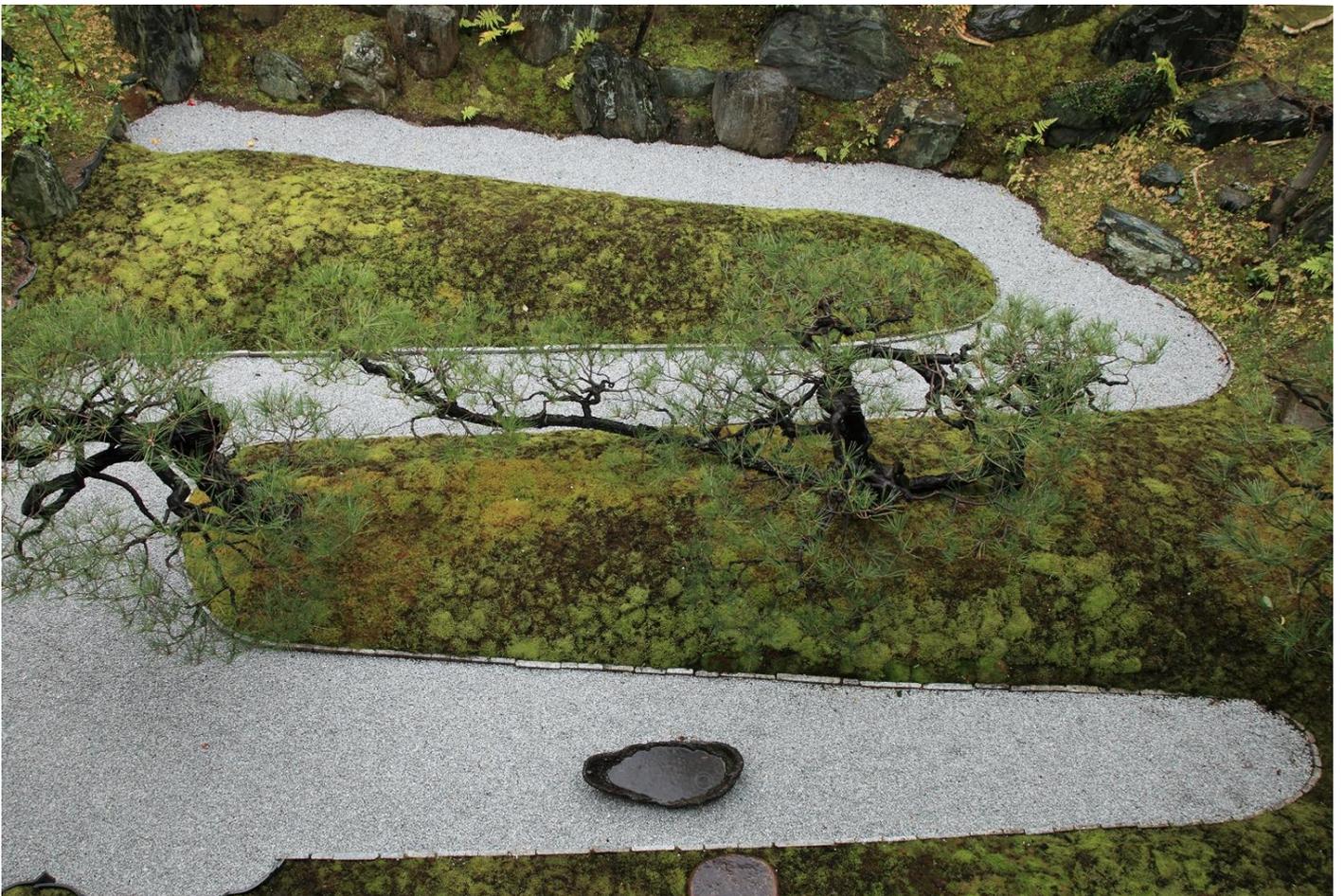
春日大社 (S12) : ほとんど無名の青年が由緒正しき春日大社に造園できたことは不思議である。狭隘な場所にシンプルな造形。



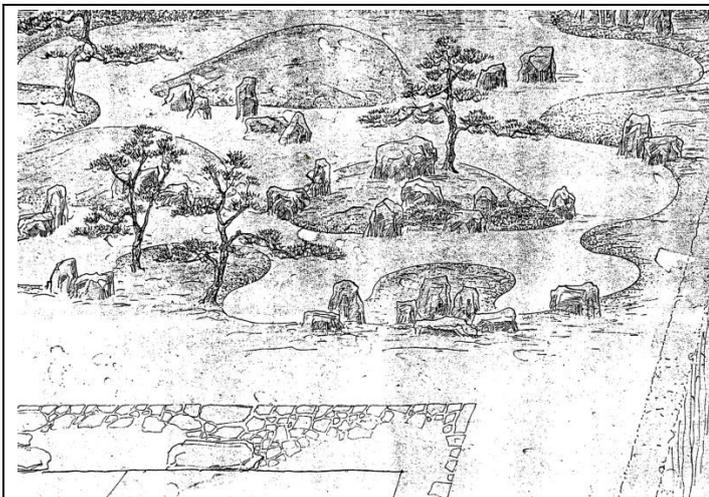
光明院 (S14) : 古庭園においては洲浜が池泉庭園の最も重要な造形であった。古庭園では海洋を象徴する池泉の造形と云えば、洲浜・荒磯・曲水がメインテーマであった。しかし、重森は光明院庭園において枯山水庭園に洲浜の造形を採用した。以後、彼の庭園の大半の造形は洲浜が骨格をなすことになる。



東福寺本坊北庭 (S14) 「市松の庭」：当初の姿は上記写真のとおりである。『庭の美』重森三玲著 第一芸文社(昭和17年発行)110 Pより引用。現在の状態は全面に苔と切石で覆われている。このモンドリアン風のデザインは誰にでも愛される親しみがあるが、重森の思いはもっと深いところにあり「白砂の地をもって図とした」卓抜なデザインに注目したい。

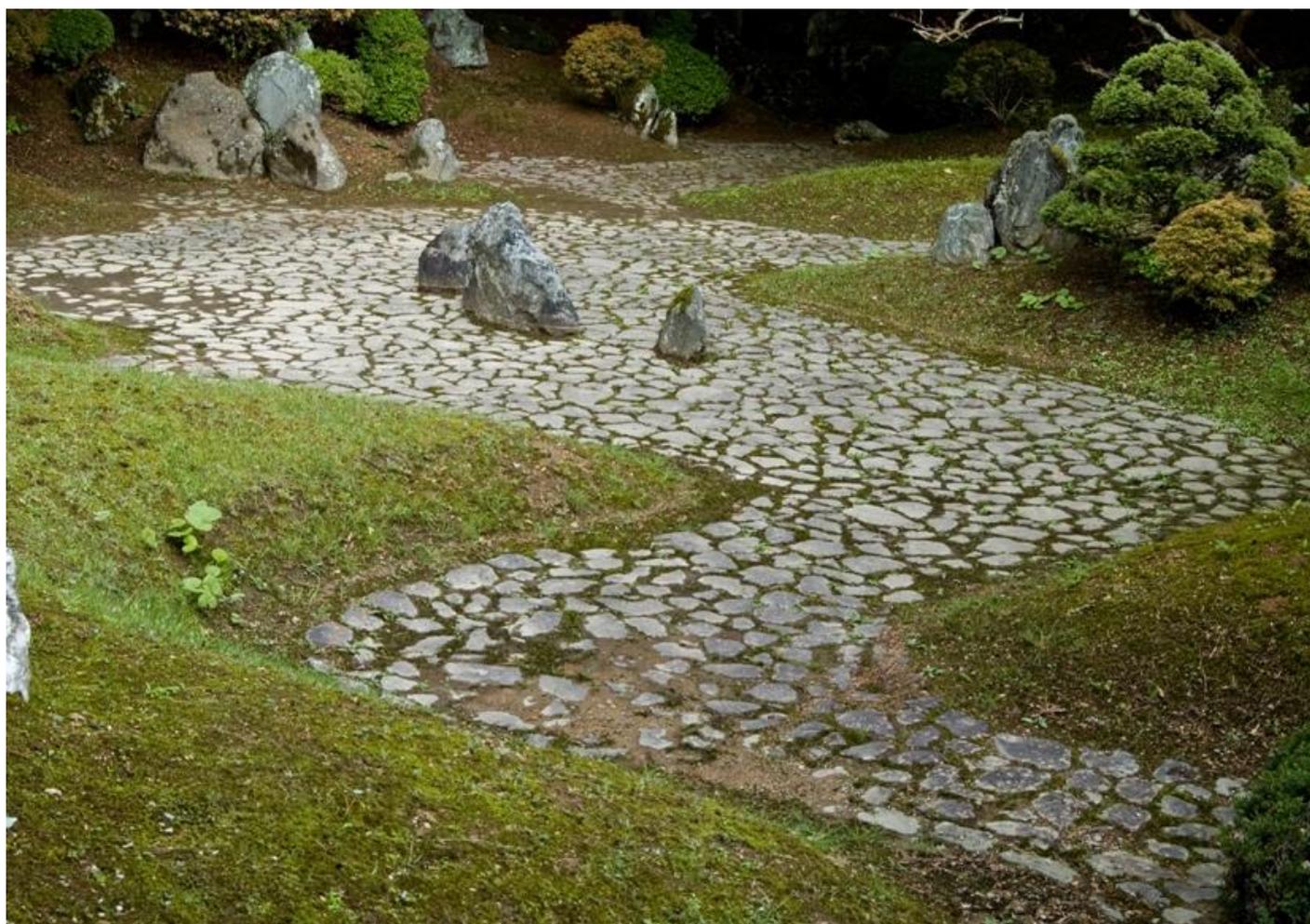


斧原家 (S15)：このシンプルな造形は上記春日大社の造形をより抽象化したデザインである。



村上家設計図：庭園は、あたかも光明院のような洲浜に囲まれた枯山水の庭だ。一方、その中の神仙島には東福寺南庭のように石組みがされている。つまり東福寺の本坊庭園と光明院庭園の混合型である。軒下の延段は洲浜ではなく直線状だ。つまり当庭は軒下に洲浜型の敷石が生れる過渡期的な庭園ともいえる。

村上家 (S24)：当庭は田園地帯の庭であるために、奥行きを十分に確保できたため、軒下の延段は洲浜にする必要性はなかった。左に示した設計図のように苔地の洲浜に囲まれた枯山水の池を見立てることが出来た。ところが後述のように前垣家 (S30) に始まる個人庭は多くの場合、市街地にあるために、奥行きを確保することが不可能の場合が多い。このような場合は視線を軒下から始まるようにするために、洲浜型の敷石が発生したと考えられる。



高臺院 I (S28)：池泉部の護岸には大小合わせると 8 か所の洲浜がある。

備考) 現在は池泉部には水が無く涸れ池になっているが、当初は水が蓄えられ、美しい洲浜を鑑賞することが出来た。



旅館永楽庵（S29）洲浜模様による、はじめての敷石による回遊路（S44年に久保家で再現された）



東家（S30）：朱色のセメントによる大胆な洲浜の造形。



前垣家(S30)：軒下に丹波・鞍馬石による洲浜の造形がデザイン化された。このデザインにより庭園は軒下から始まることになる。この手法は個人邸における地割の根幹をなすことになる。つまり奥行きが少ない市街地の土地であっても、奥行きの深い庭園になるからだ。



前垣家(S30)：入れ違える洲浜の造形は庭園に奥行きを与える効果がある。昭和15年の斧原亭では、シンプルなデザインであったが、前垣邸においては洲浜は平面的にも立体的にも凹凸を付けた自然風の造形にした。



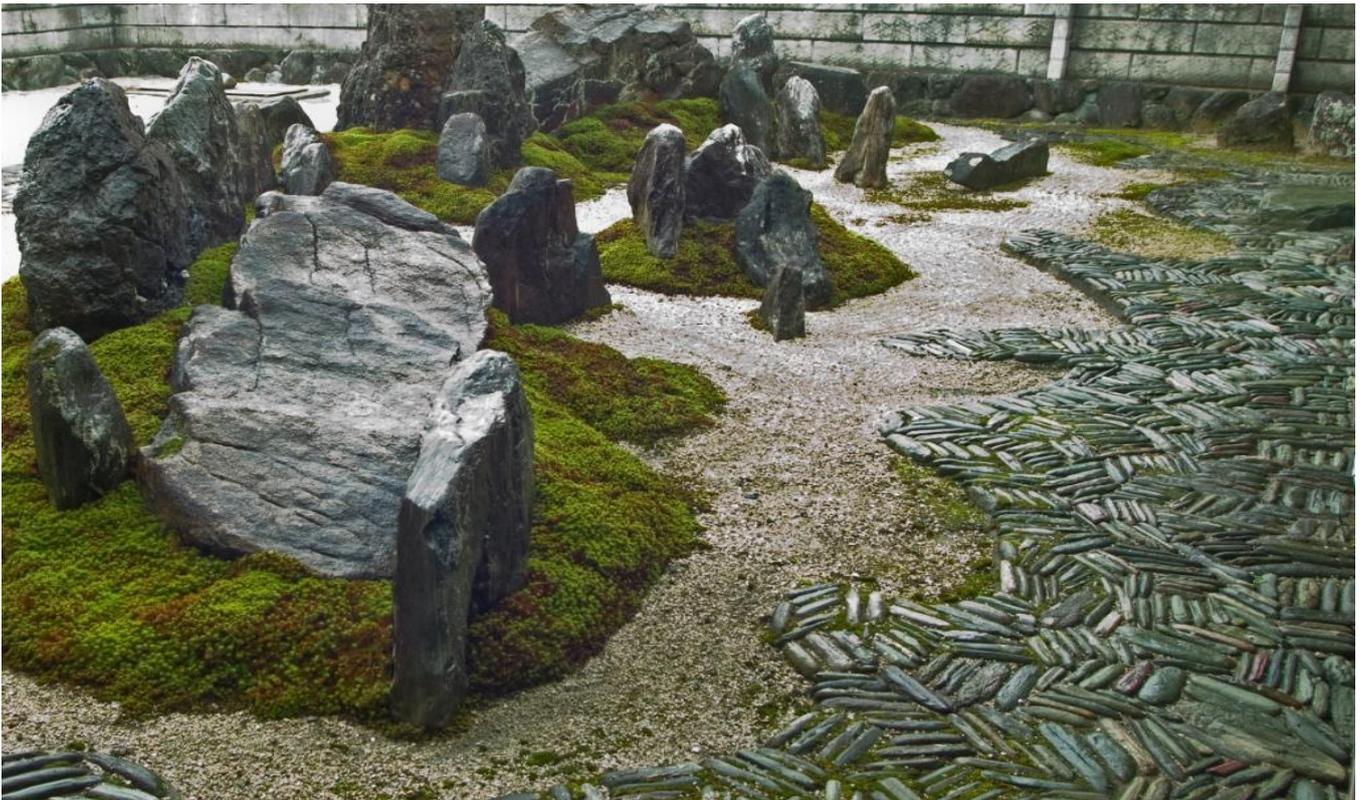
増井家(S31)：網代模様の洲浜は当地の香東川の棒石によるもので、丹波鞍馬石の洲浜とで二重洲浜にした新規な試み。



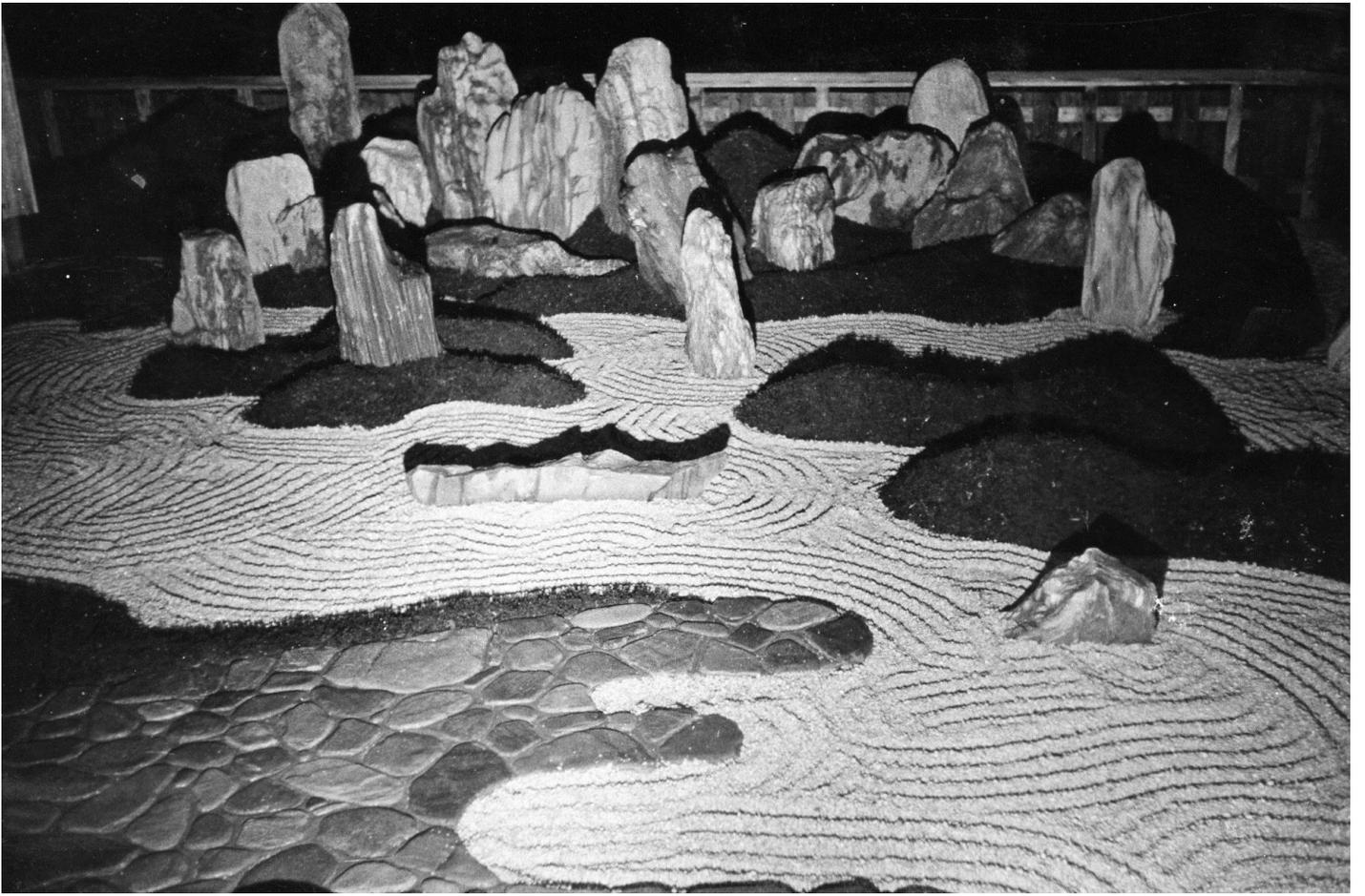
増井家(S31)：網代模様



織田家 (S32)：伊予の棒石による網代模様



織田家 (S32)：上記網代模様による洲浜が庭園の4周に巡らされた、豪華極まりない造形。



岡本家 (S32) : 軒下の洲浜模様に青石を使った初めての例



旧片山家 (S32) : 重森は高さ 3m、長さ 80m の塀には困惑した。打開策として洲浜を含む石組の背後に水墨画を描き閉塞感を克服した。



光明禅寺 (S32) : 苔地による柔らかな洲浜模様が美しい(ただし、当写真は落葉の時期のため、その価値が半減)。



白杵家 (S35) : 奥行きが無い場所には軒下から始まる、洲浜の造形は欠くことが出来ない、重森のツールである。



小河家 (S35) : 当亭の庭は昭和 33 年に着手して書院、茶室は一応昭和 35 年に完成した。しかしその後昭和 36 年、37 年、38 年と逐次増設工事を行い、漸く 40 年に完成した。実に 8 年をかけての工事である。庭園は何と云っても二列の築山上に組まれた巨大な石組み群である。「絢爛豪華」と言う言葉がぴったりである。一方、上記写真のような繊細華麗な露地や流麗な襖絵、彫金の引手、網干模様の竹垣、インカ風の出隅入隅のある延段、西芳寺の龍淵水に啓発された蹲踞など、斬新な試みは枚挙に暇がない。



教法院 (S38) : 園内には左右から苔地の洲浜が縦横無尽に張り出している。



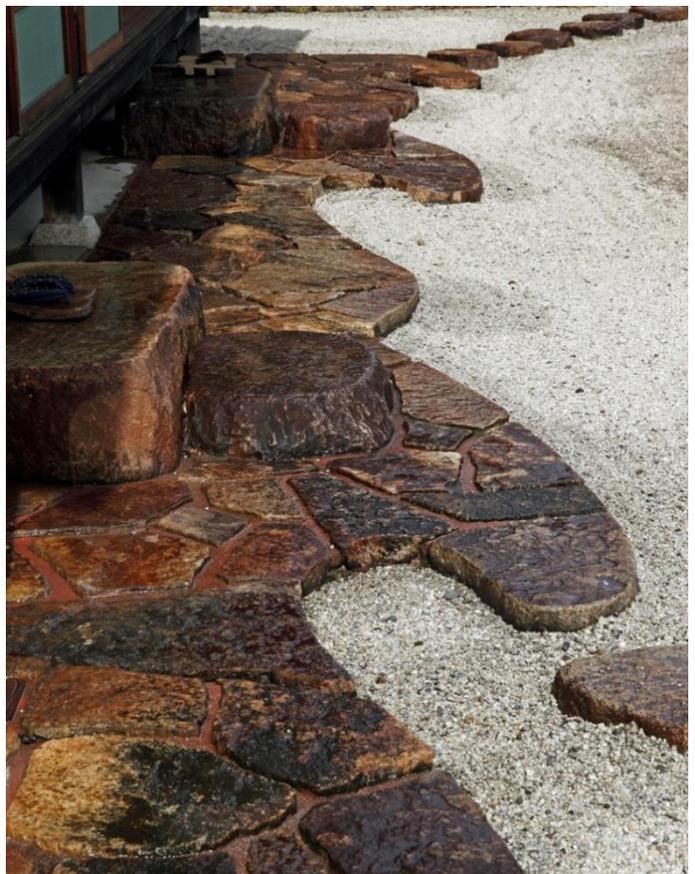
高臺院II (S38) : 軒下にある鮮やかな延段



清原家 (S40) : 地上に描いた現代絵画ともいえる。三重州浜の造形 (丹波鞍馬石・直径約20cmの丸い石・苔地) のデザイン。当庭は1・2階の全ての部屋から鑑賞できる。



北野美術館 (S40)
変化にとんだ長大な洲浜庭園ともいえる。美術館のテラス側から、青石、丹波鞍馬石、青い棒石による三重の州浜である。



横山家 (S43)
巨大な庭園に面した書院前には縦横無尽に湾曲した丹波鞍馬石に敷石がある。目地は例のごとく鮮やかな朱色である。



旧友琳会館 (S44)

当庭園の南側にある造形が有名であるが、この造形は旧来の日本庭園とは正反対とも入れる斬新な造形である。旧所有者の友琳会館に因んで友禅染の図案である「束ね熨斗」をデザイン化したものである。

一方庁舎の北側には上記デザインのような優美な「霞型の洲浜」がある。重森の洲浜の中で最も流麗と思われる美しいデザインである。しかし、画面左下には白砂と敷石を画する、一直線のラインも見どころである。霞型の洲浜は自然の風景を抽象化したことに由来するが、この直線の意味することは「芸術とは単に自然を抽象化するのみならず、自然を超えた自然、言い換えれば作者の自然が投影されなければならない」ことである。何気ない造形にも重森の神髄が示されていると思う。



久保家 (S44) : 巨石群を縫うように、洲浜模様の回遊路が巡らされている。 上述の旅館永楽庵 (S29) の完成形。



田茂井家 (S45) : 洗出し工法の最初期の庭



深森家 (S45) ; 苔地と洗出し工法が併存している



重森家 (庭園の完成は S45 年であるが、書院周囲に設けられた州浜は S31 年に作られていた)



芦田家 (S46) : 書院軒下には丹波鞍馬石による洲浜が敷かれ、庭園には巨石による神仙島が組まれている。護岸は洗出し工法による洲浜が造形されている。



小林家 (S46) : 出島が交錯したような洲浜には青石が葺かれている。斧原家 (S15) や前垣家 (S30) の発展形。



志方家 (S47) セメントによる自由なデザイン



岸本家 (S47) : 建物と隣家との塀の間が少ない地形であるが、横長の敷石による洲浜と、洗出しによる出島状の洲浜が地割され、狭隘感が感じにくい。



泉涌寺 (S48) : 当庭の基本的な地割は全庭を複雑な洲浜模様の築山が築かれている。その上に石組みがされている。



福智院 (S48) : 鮮やかな出島上に 15 石の青石が組まれている。

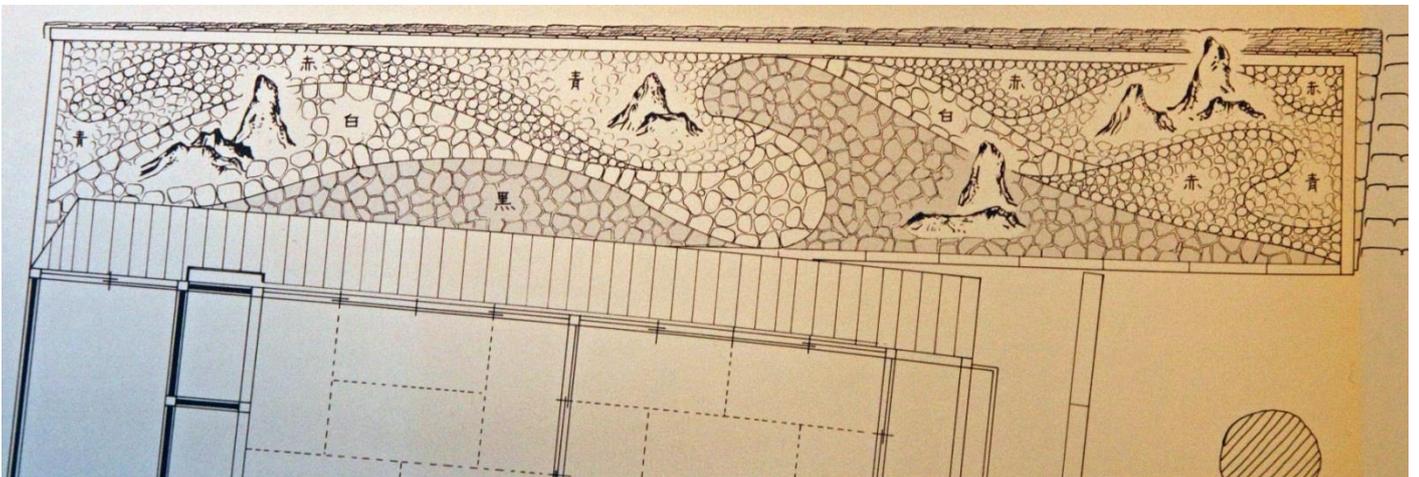


福智院 (S48)

建物の軒下には黒色の石と朱色の目地の洲浜が敷かれている。一方、池の護岸は青石と朱色の目地の護岸が極端にデフォルメされた造形になっている。最晩年の重森の作品であることを物語っている。



本休寺 (S49) 『重森三玲作品集』 重森三玲作品刊行会著 誠文堂新光社 161P・折込⑫



土塀と縁先の距離は約3mであるが、七五三の石組みをしているが、狭隘な敷地を感じさせないような、すばらしい洲浜の造形を作った。重森の面目躍如である。



八木家 (S49) : 砂利と苔地による二重洲浜



東口家(S49) : 裏庭にも白砂と黒砂のコントラストの洲浜模様



千葉家 (S49) : 大小5つの出島が中心に向かって張り出している。石組みは九山八海を象徴した石組みがなされている。近くにある毛越寺の出島と煌びやかであった平安時代を思い起こさせる。



松尾大社 (S50) : 洲浜は重森そのものと言える。洲浜に始まり洲浜で終わっている。青石で覆われた3本の洲浜が左右から出て、曲水の流れを象っている。